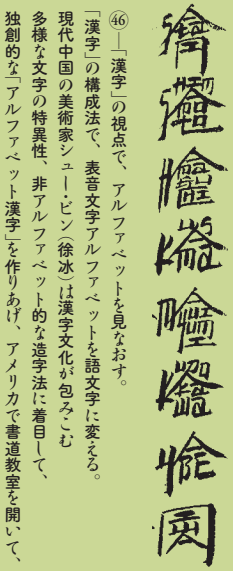
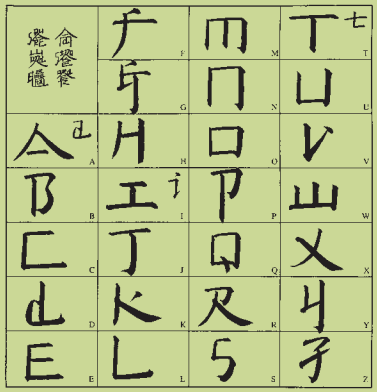
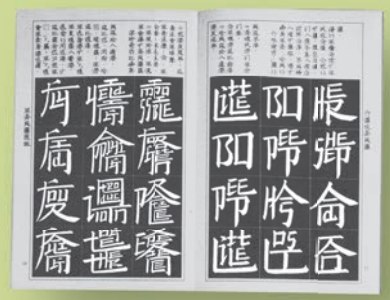
C·L·A·S·S·R·O·O·M

C·A·L·L·I·G·R·A·P·H·Y



㊻—「漢字」の視点で、アルファベットを見なおす。「漢字」の構成法で、表音文字アルファベットを語文字に変える。現代中国の美術家シュー・ビン（徐冰）は漢字文化が包みこむ多様な文字の特異性、非アルファベット的な造字法に着目して、独創的な「アルファベット漢字」を作りあげ、アメリカで書道教室を開いて、人びとを驚かせた。一文字、一単語。解読を試みてみませんか…。





松 江戸時代までは、ほんとにそういうものがありました。ところが明治に入ったとたんにローマ字表記にしようとか、ルビも全廃しようという山本有三の動きなども影響して、やっぱりなにか中島敦の呪いみたいなものが消えるほうにどんどんどんどん追い込まれていってしまいましたね。というか、中島敦にさえ近づけなくなるところへ向かっている。それでも江戸川乱歩のように自分で活版印刷所をやろうとした文人もいましたが、バルザックのように失敗していった。

杉 明治以降は、活字が一つの権威づけに使われることになる。みずから背広を着、ネクタイを締めてしまうわけだけど、江戸ではまだ筆が一本あると、一本の筆で漢字を記し、かなを書き、ルビをつけて、あげくの果てに絵を描いてしまう。式亭三馬でも誰でも、みんな毛筆一本で絵まで描いてしまいますね。そのうえで、本の格好までにしてしまうという、闊達さというか、全体性というか、統合性というか…。そういうものが備わっていたんです。

その意味で毛筆は、クレオール的表現を可能にする筆記具ですね。漢字がもともと持っていた森羅万象を、一文字に凝縮してみせるという特質に近いものをもつと思う。

松 レオナルド・ダ・ヴィンチなんかが持っている才能に近いものが、山東京伝や式亭三馬や、戯作者や浮世絵作家一人ずつが手の先からひねり出せていたんじゃないんでしょうかね。筆の妙味かもしれません。けれども、それがシ